

論文審査結果の要旨

本論文は、Aバー構文として分析されてきた WH 疑問文と比較して、名詞句からの外置(Extraposition from NP: ExNP) 構文を中心とする英語の右方焦点化、修飾に関わる各種構文の文法的特性を一般原理に基づく独自の分析で解明しようとしたものである。生成文法理論研究においては、ミニマリスト統語論が近年盛んに研究されており、中でも Chomsky (2008)において提案されたフェイズ理論の有効性が着目されている。本研究は、フェイズ理論に独自の提案を加えることにより、先に挙げた様々な構文が統一的に説明できることを詳細な具体例に基づき実証し、フェイズ理論の妥当性と新たな可能性を明らかにしたものである。

本論文の第1章では、WH 疑問文と ExNP 構文の一般的な文法的特徴を提示し、それを説明する上で必要となる理論的枠組みを概観した。第2章では、本論文の理論的基盤である Chomsky (2008)のフェイズ理論を概説し、その枠組みにおける WH 疑問文の統語派生を示した。更に、ExNP 構文の主な文法的特徴と、それに対する三通りの先行研究 (Kayne (1994)、Fox and Nissenbaum (1999)、Chomsky (2004, 2008)) を取り上げ、その理論的・経験的問題点を指摘した。

第3章では、前章で概観した Chomsky (2008)のフェイズ理論並びにミニマリスト統語論の枠組みにおける先行研究の理論的成果を踏まえ、フェイズ理論に基づく独自の提案をおこなった。それは、①併合操作の方向性と併合要素が担う AF の関連性、②同一の転送領域中における修飾解釈の為に必要とされる EF 継承メカニズム、③フェイズ主要部の EF による併合要素に対して適用される独立した転送操作に関するものである。そして、これらの相互作用により、フェイズ理論の枠組みで WH 疑問文と ExNP 構文の派生が統一的に説明可能となることを主張した。特に、両構文に見られる主語と目的語の様々な文法的対称性は、本分析の下では C と v*によるフェイズ投射内の対称的な統語操作に基づき捉えられることを明らかにした。

第4章では、前章での提案に基づき WH 疑問文と ExNP 構文の多様な文法的特性の解明を試みた。まず、両者の文法的共通点として、補部要素と付加部要素が非対称的であることと、Aバー併合要素内からの要素の取り出しが不可能であることを示し、前者は内部併合と外部併合という二種類の併合操作の下で自然に捉えられ、後者は③により正しく説明できることを論じた。さらに、後者の分析の帰結として、主語や付加部、複合名詞句の内部からの要素の取り出しの違反を示す事例に対しても Huang (1982)、Stepanov (2001, 2007)などの先行研究の問題点を克服し、原理的な説明を与えることができることを示し、従来の「島」制約に対する新たな分析を提案した。また、WH 疑問文と ExNP 構文の文法的相違点として、併合要素の節境界の有無の違いを指摘し、同一の転送領域中における修飾関係の形成の有無に基づくものであることを主張した。さらに、否定極性表現の認可、主語からの外置における述部制限、そして主語と目的語の位置上の相違といった ExNP 構文独自の特徴を説明した。

第5章では、本分析の更なる妥当性を示す為に、ExNP 構文以外の右方併合構文として重名詞句転移構文と二次述語構文の統語派生と文法的特徴を、フェイズ理論に基づく本分析の下で説明できることを示した。第6章で論をまとめた。

本論文は、主に英語の統語構造と右方焦点化、修飾関係に関する実証的研究であるが、本研究の成果は、フェイズ理論の妥当性を検証するのみならず、統語派生の局所性ならびに、統語派生と意味解釈の相関に関する重要な基礎的研究として、生成文法における理論研究において大きな貢献をするものと高く評価することができる。

以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士(文学)の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。